

シネマ日記



No. 67

○月×日 「11・25 自決の日 三島由紀夫と若者たち」(若松孝二監督)は社会党委員長・浅沼稻次郎が右翼の少年に刺殺されたニュース映像から始まる。60年安保から70年安保への10年間は、反権力を叫んだ全共闘運動、差別への怒りをぶつけた金婚老事件等など、右も左も「憂国」への思いに駆られた時代だった。この政治の季節に、作家の三島由紀夫は二・二六事件の青年将校に憧憬を抱いていたこともあり、自衛隊体験入隊や民族派学生と出会い、時代への危機感と焦燥を深めていく。映画は当時の政治事件の記録映像を挿入しながら、三島の行動を追っていく。過激化する学生

習場を再訪して眩く。「何も変わっていないわ」。いや、40年後の今日でも、時代状況は何も変わっていない。監督の若松孝二の思いも、そこにあったのだろう。

○月×日 「相馬看花」(松林要樹監督)は福島第一原発から20キロ圏内にある南相馬市原町の人々の避難の日常を追ったドキュメンタリー。4月3日、津波と放射能汚染と強制退去で様変わりした、この地域に監督の松林は救援物資を携えて入ったのだが、市議の田中京子さんとの偶然の出会いもあった、その日から避難所で寝泊りするなどして、カメラを回し始める。土地を奪われた怒り、哀しみ。日常のすべてを失われながらも、ここで生きてきた人々のなんともし優しいこと。そうした日常をたんと映し出していく。タイトルの由来は中国の故事「走馬看花」からだそうで、元来は物事の本質をうわべだけで見て回ることの意味だが、あえて「走っている馬の上からも花という大事なものを見落とさない」と解釈したのだという。無人の家々

運動に対し、警察が騒乱罪の適用で鎮圧したため、自衛隊の治安出動を願っていた三島は、自らの決起の機会を失ってしまう。挙げ句、70年11月25日、自衛隊市ヶ谷駐屯地で自衛隊員に決起を促す演説をした後、剖腹自殺を遂げて、三島の「クーデター」は終わった。彼が全共闘学生の集會に呼ばれて講演した際、「君らがここで〈天皇陛下万歳〉と叫んでくれたら、いつでも共闘できる」と言ったが、本音であったに違いない。また自衛隊への「出撃」を前に、辞世の歌を詠み、楯の会の学生らと共に高倉健の「唐獅子牡丹」を唱和する。「義理と人情を秤にかけりや、義理が重たい男の世界」と歌うのである。三島が感じていた美学、ダン

ディズムというものだろう。ただ三島が抱いていた自衛隊への希望、その後の絶望を通じて、その背後にあった憂国の観念、思想を当時の世間もそうだったが、映画でも十分に解き明かしたわけではない。ラストシーン、三島の妻が事件から5年後、自衛隊の東富士演

の庭先にも、四季折々に美しい花が何事もなかったかのように咲いているシーンが写し取られており、原発災害の悲劇がそれに凝縮されているように思った。

○月×日 誰もが高校生の頃は輝かしい青春の日々だったことに思いを馳せるだろう。その後の人生を重ねて：。「ザニー 永遠の仲間たち」(カン・ヒョンチヨル監督)は25年前、ソウルの女子高校生だった仲良し7人組が再会を果たし、再び友情と人生の輝きを取り戻していく物語。こう書くとも元も子もないのだが、韓国の80年代、民主化への揺るぎのない歩みが始まり、日々の暮らしが良くなり、未来は明るいと信じていた時代背景での、馬鹿な純な行動、ひたすら友情を信じた青春：。老書生も思わず涙が溢れてしまった。

○月×日 「ル・アーブルの靴磨き」(テキ・カウリスマキ監督)、「ギリマンジャロの雪」(ロペール・ゲデイキヤン監督)の仏映画2作は港町を舞台に、人間の善意や人生を肯定した現代版「お伽草子」だ。(内藤哲